



こんぴらさん障壁画の謎

—若冲・岸岱をめぐって—

【第6章】

伊藤若冲¹

現在、江戸絵画人気画家の筆頭に挙げられるのが伊藤若冲であろう。

展覧会を開催すれば多くの人が鑑賞に訪れ、若冲ブームを巻き起こしている。江戸中期から後期にかけては個性的な絵画表現を行う画家が多数現われ、様々な流派がそれぞれの画風を確立させた。円山応挙、与謝蕪村、曾我蕭白、長澤蘆雪、岸駒などなど、その作品は現代においても人気を博している。

それでは、奇想の画家ともよばれ、金刀比羅宮奥書院の障壁画を手がけた伊藤若冲(1716~1800)はどのような生涯を送ったかみていこう。

名は汝鈞、字を景和、号は若冲。斗米庵、米斗翁とも称す。名を初め春教と記す文書もある。18世紀の江戸時代中期に京で活躍した画家で、当時から有名だったことは、京の著名人を掲載した人名録『平安人物志』画家の部上位に登場することから明らかである。明和5年版(1768)では大西酔月、円山応挙に次いで3番目(若冲53歳)に「**藤 汝鈞 字景和号若冲 高倉錦小路上ル町 若冲**」と掲載され、安永4年版(1775)・天明2年版(1782)では円山応挙に次ぎ2番目(若冲60歳・67歳)に登場する。



久保田米僊筆 伊藤若冲像 絹本着色
55.0×34.9cm(相国寺蔵)

京都錦小路高倉の屋号「柵屋」という裕福な青物問屋の長男として生まれ23歳で家業を継ぐ。宝暦5年(1755)40歳にて家業を次弟に譲り画業に邁進する。若冲の履歴や人物像については、相国寺の僧・大典の詩文集『小雲棲稿』(1775刊)に収録された『藤景和画記』(1760頃)や、若冲の生前に相国寺に建立した墓碑銘『若冲居士寿蔵碣銘』(1766)によって知ることができる。

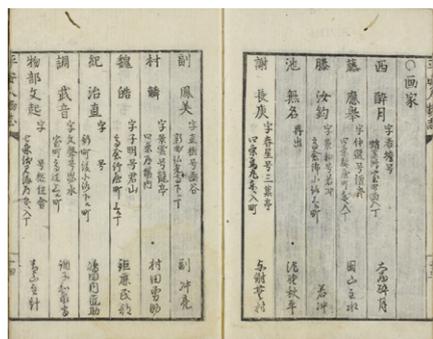
それらによると、10代半ばから絵を描き始め、若いころは学問を好まず書をよくせず、特技もない。歌曲や宴といった人の娯楽といったものや名声を望むようなことにも興味がなかったようだ。絵を学びはじめたのは20代後半と推測されている。はじめ狩野派に学んだとあり、それは大坂の狩野派画家の大岡春卜と考えられていたが、京狩野派の青木左衛門言明という説もある。

次に宋元画の模写を1000本程行うも、模写では宋元の画人と肩を並べることはできないと感じ、自分で直接見て観察した物を描こうとする。

古代中国の故事や人物はいないし、日本の人物は描きたくない。山水も画にするほどのものにあつたことがない。しかたなく動植物を対象にするが、孔雀・翡翠・鸚鵡・錦鶏などはいつも見られない。鶏だけは村里に飼われており、その羽毛の色彩も美しい。自分はこれから始めよう。と庭に数十羽の鶏を放し飼いにし観察・写生を繰り返



平安人物志 明和5年版(京都府立京都学・歴史館蔵)



平安人物志 明和5年版 画家の部(京都府立京都学・歴史館蔵)



した。そして今度は草木や鳥、虫や魚などさまざまな動植物を描くようになった。それぞれの形状を知り尽くし理解すれば何でも描くことができるようになったと大典は伝えている。若冲はこのように絵画を学んでいった。

「若冲」という呼称は本名でなく居士号であり、居士とは仏教に帰依した在家信者のことである。

『老子』第四十五章に「大盈若冲、其用不窮」[大盈は沖しき若きも、その用は窮まらず]

充ちたりているものは、なかが空虚なように見えるが、その用途は無窮である。(斎藤响『全釈漢文大系 第十五卷 老子』1980)に因むもので、相国寺の大典が授けたものといわれており、30代の半ば以降使用したようだ。宝暦2年(1752)、37歳の時に描いた《松樹番鶏図》に「若冲居士」の款記があり制作年の明らかな最も早い作品である(所在不明)。

若冲がどんな人柄だったか想像できるような逸話が伝わっている。

在家のまま仏門に帰依し仏教徒となった若冲は頭髪を剃り生臭い野菜や肉を食せず、妻子を持たない生活を送った(『若冲居士寿蔵碕銘』)。

市場で雀売りに会った若冲は、雀を憐み数十羽を買って家の庭に放してやった(『小雲棲稿』巻1)。

岡君章という人が若冲と大典へお中元の素麺を贈った。若冲は筐を押さえて大典にはあげないよというしぐさをみせたという(『小雲棲手簡』初編巻上(1777刊))。

敬虔な仏教徒であり生真面目な性格ながらも、ほほえましい一面を垣間見せるエピソードである。

宝暦5年(1755)、若冲40歳のとき《旭日鳳凰図》(宮内庁三の丸尚蔵館)を描き、自賛の句に「花鳥草虫各霊有り、真ヲ認メ方ニ始メテ丹青ニ賦ス。九苞ノ彩羽観ルニ応ゼズ、意ヲ得テ何ゾ形ニ画クヲ防ゲン也」と記す。また《虎図》(エツコ&ジョープライスコレクション)には「我レ物象ヲ画クニ真ニ非ザレバ図セズ。国ニ猛虎ナケレバ、毛益ニ做ツテ模ス」と記され、真をいかに表現するか若冲の絵画に対する理念を感じ取ることができる。

若冲の代表作といえば、《動植綵絵》30幅であろう。制作に10年もの歳月を費やし、明和3年(1766)には完成したと思われ、明和7年(1770)10月までに相国寺に全て寄進されたようだ。明治の廃仏毀釈により相国寺は疲弊し明治22年(1889)宮内省に献納された。この下賜金によって相国寺は寺地を買い戻すことができた。

《動植綵絵》について大典は賞賛し、文化人の売茶翁(1675～1763)は宝暦10年(1760)の冬至の日に見て「丹青活手妙通神」(絵画の見事さは神に通じている)という賞賛の「一行書」を若冲に贈った。若冲も嬉しかったのであろう。《動植綵絵》のうち3



伊藤若冲筆 動植綵絵 老松白鳳図 絹本着色
141.8×79.7cm(皇居三の丸尚蔵館収蔵)

幅(《池辺群虫図》《蓮池遊魚図》《牡丹小禽図》)に「丹青活手妙通神」の句を遊印として画面に押している。

川井桂山の詩集『大橋集』の詩「丹青歌寄若冲山人」の記述に「君他日名区に蔵め 以て千載具眼徒を埃つと」と若冲が発言したという句が佐藤康宏氏によって紹介された。桂山が《動植綵絵》を見たときに若冲が「この画を後日しかるべきところに収め、私の絵の価値がわかる人を千年待つ」と言ったという。桂山は、「この画のすばらしさはすでに明らかなのに千年も待つ必要はないではないか」とかえした。若冲の絵は当時すでに評価されていたが、真の価値は理解されていないと思ったのだろうか。若冲が絵にこめた想いとは何だったのか。制作途中の明和2年(1765)9月29日、《動植綵絵》24幅と《釈迦三尊像》3幅を寺に寄進した理由は亡くなった父の27回忌にあたり、その供養のためと考えられている。また同月19日に跡取りとして期待していた末弟宗寂が亡くなったことも関係しているといわれる。そして、亡父33回忌にあたる明和7年(1770)10月、全33幅が寄進されたことが位牌銘に明記される。亡き父と弟、そして将来の自身と母の供養を願い寄進されたであろうことがうかがえる。《釈迦三尊像》3幅と《動植綵絵》30幅を合わせると33幅となり、「三十三」という数は観音経(法華経観世音菩薩普門品)が説く観音菩薩が三十三の姿に変化して人々を救うという信仰を意識したものではないかという説もある。



《動植綵絵》の制作最中であった宝暦9年(1759)京都・鹿苑寺(金閣寺)大書院に水墨による障壁画を制作、明和元年(1764)に金刀比羅宮奥書院に着色による障壁画を制作した。

藤岡作太郎『近世絵画史』に「伊藤若冲は元明の風に光琳の筆意を交へ」、「若冲はじめ狩野風の画を学び、のち元明の古蹟を模し、また尾形光琳の設色法を喜び、これらを折衷して一家の風をなす」²と記される。《動植綵絵》後半期からは、鮮やかな色彩と緻密な写実表現だけでなく、より装飾的で抽象的な世界観の作風へと展開・変容していく過程にあると思われる。

若冲は、水墨画にも取り組んでおり、にじみやすい画箋紙に筋目描きの技法を駆使し描いた水墨画を一斗の米と交換し収入にしたので斗米庵という号を使用したという。

人付き合いが苦手で絵ばかり描いていると思われた若冲だが、大典をはじめ高遊外壳茶翁、木村兼葭堂など文化人たちと交流しそのネットワークの中で暮らしていた。宇佐美英機「京都錦高倉青物市場の公認をめぐる」論文により明和8年(1771)から安永3年(1774)、若冲56歳から59歳まで町年寄として錦小路青物市場のトラブル解決の役を担っていたことが判明した。責任感のある実務家な一面もあったようだ。

安永2年(1773)58歳のとき萬福寺の黄檗僧・伯珣照浩(1695～1776)と面会し、「^{かくそう}革叟」の道号と僧衣を与えられ黄檗僧となる。

天明8年(1788)1月晦日から翌日にかけての大火により、若冲の居宅とアトリエは焼失してしまう。知人や寺院を訪ねて作画を続け、京都・石峰寺に妹と隠棲する。

絵一枚を米一斗の値で売る生活を送り、一斗六匁で客の要望に応じて作品を制作し、その代金で石峰寺裏山の石像を石工に依頼

していたようだ。米斗翁と称したのはこの頃である。そして最晩年の寛政10年(1798)石峰寺観音堂の格天井に花卉図を制作したと考えられている(現在は信行寺に168面、義仲寺に15面が現存)。

寛政12年(1800)数え年85歳で世を去った。

以上、簡単にはあるが若冲の生涯をみてきた。多くの人々を惹きつける若冲作品の魅力は何だろうか。緻密で丁寧に描かれた色鮮やかな着色画の一方、水墨画では墨の濃淡や筆遣いを生かし豊かな表情の作品を生み出した。

若冲の作品からは、あらゆるものには仏性が宿り成仏する「草木国土悉皆成仏」という思想を感じ取ることができるといわれる。ものに宿る美しさを写實的に色彩豊かに描き、時にはユーモアをもって独自の意匠をつくりあげ表現した。

若冲が生きた18世紀は京都画壇の全盛期で多くの画家たちがしのぎを削っていた。裕福な家に生まれ画料を得るための制作に縛られず、画材にもこだわった若冲は、自らの画室を「独楽窩」(独り楽しむあなぐら)と名付けたように、心の赴くまま自由に描くことができた幸運な画家といえる。そして、その特異な才能をいかんなく発揮し制作された作品は日本美術の宝としてこれからも人々を魅了しつづけていくであろう。

¹ 伊藤若冲については下記を参照した。
「文化財保護法50年記念事業 特別展覧会 没後200年 若冲」京都国立博物館、2000
狩野博幸「伊藤若冲について」(同書所収論文)
佐藤康宏「もっと知りたい伊藤若冲 生涯と作品」東京美術、2006
太田彩「伊藤若冲作品集」東京美術、2015
辻惟雄、他「若冲ワンダフルワールド」新潮社、2016
朝日新聞出版編「若冲の花」辻惟雄監修、朝日新聞出版、2016
佐藤康宏「若冲伝」河出書房新社、2019
辻惟雄「よみがえる天才1 伊藤若冲」筑摩書房、2020
² 藤岡作太郎『近世絵画史』ベリカン社、1983、p.112、p.116